
忙しい未来

常盤夢人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忙しい未来

【Zコード】

Z9964F

【作者名】

常盤夢人

【あらすじ】

ある日、久信は、学校の帰りにおじさんの奇妙な言葉を聞く。翌日、TVをつけるとおじさんの言う通りになっていた。現状にあきあきしていた久信だが、ある理由でおじさんを見つけだし、未来を変えようと決心する。

何もかもが嫌だから、昼まで寝て いる事にした。

そんな事で、未来が変わるはずのないのは誰より知つてゐつもりだつた。

何かがおかしいんだ。でも、その何かがはつきりとした言葉では言えない。

春の心地良い風に吹かれて、1日前の出来事を久信はゆづくつと思ひ出してみた。

朝は、いつもよりも早く起きられた。何だか時間に追われない朝はとっても清々しいものだつた。

それから、朝ご飯を食べて家を出たのが8時少し前だつた。なんとなく、いつもと変わらない久信の学校での日常が終わるうとしていた。

ただ、いつもと違つた点が一つだけあつた。帰り道に、奇妙な、いかにも怪しいおじさんに変な話を聞かせられた事だつた。

話しかけられた時は宗教の勧誘かと思つた。無視するのもかわいそうに思えたし、何より退屈すぎた。興味本位で、おじさんの話を聞いた。

そして、そんな事は忘れて昨日は寝てしまつたんだ。

問題は、今日の朝だ。

いつもの様に起きて、TVをつけた。チャンネルを回してたら、速報ニュースが流れてきた。

バカバカしいとその時は思つた。

でも、もしかしたら、万が一って事があるかもしぬないって思つた。

ニュースが流れてきた。アナウンサーが興奮した様子で話していた。画面は、見なくても声の調子だけでそれは、分かつた。アナウンサーの言った事が最初は、信じられなかつた。

いや、正確に言うと信じようとなかつただけかもしない。

まとめるにこりうだ、今日の朝に飛行機が墜落した。墜落したのは8時30分羽田発の札幌行きだつた。しかも、機長の名前が斎藤だつた。

そのニュースを聞き終わつたと同時に、久信は凍りついた。

そして、全てはあのおじさんの言った通りだつた事がゆつくりと分かつた。

出会い

晴れた空とは対照的に久信は、あれこれと悩んでいた。

たまたまかもしれない。久信は、そう思つ事にした。その方が良いと思つたからだ。

確かに、飛行機事故なんて滅多におきない。たまたま、おじさんが言つた事が偶然おきただけだ。

しかし、昼飯の焼きそばもあまり喉を通らなかつた。身体は、現状を受け入れていらないらしい。

気付いたら、母親に図書館で課題を終わらすと言つて駅に向かつていた。やはり、空は晴れていてこれから、雨が降るなんて信じられないくらい爽やかだつた。

しかし、久信にはどうしても確かめたい事があつた。そう、あの時におじさんが言つていた銀行強盗だ。

今日の確か夕方に襲撃される所までは、聞いていた。その先は、聞き流して帰つてしまつたから分からぬ。

久信が到着した時はまだ、四ツ谷銀行の南青羽支店は強盗には襲われていないらしかつた。

一応、店内に入つてみた。すると、女性が何やら支店長を呼ぶふうに話していた。多分、自分と同じぐらいの歳の女性だろう。職員も困惑氣味に応対しているのが、遠くからでも分かつた。近くまで言つて会話を聞きたい衝動に久信は駆られた。

「いい加減にして下さい。」

その時、職員が怒つていた。

「だから、何度も言つたら分かるの！」
女性も食い下がらなかつた。

「これ以上、デタラメを言つなら警察を呼びますよ。」

「もう、好きにして下さい。」女性は、怒つて出て行つた。

「まったく、あんな寄は困るよ。今、強盗が来るだつてさ。」
さつき女性と応対した職員が同僚に文句を言つていていた。

その瞬間、久信ははつと我にかえつた。すぐに、さつきの女性を追い掛けた。先の交差点にいるのが見えた。まだ、信号を渡つていなかつた。久信は、全力で走つて女性まで追い付いた。ここ最近、運動してないせいで息はすぐにあがつた。交差点の信号が赤から青に変わつた時に、久信は話しかけた。

「すいません。」

「はい、何ですか？」

女性は、警戒している様だつた。

「あの、さつきの銀行でのやり取りを聞きました。」

女性は、顔を赤くした。

「それで、何で強盗に襲われると思つたんですか？」

久信は続けた。

「どうせ、信じないでしようけど、ある人が、言つた事が現実になつてゐるから。それで、あたしは、」

最後まで言い終わらない間に、久信は身が凍りついた。

「ちょっと、おじさんは他に何か言つてたのか？」
急に口が動いていた。

「おじさん？ 何で知つてるの？ 男性だつて、、、。」

その瞬間、女性もはつとして久信と目があつた。一人で数秒見つめ
合つていた後、女性が口を開いた。

「ここじゃ、まずいわね。あそこの店に入りましょう。」

言われた通りに、久信は喫茶店に入った。

薄ぐらいた喫茶店は、非現実的な他人に聞かれたらおかしだろうと思
われる会話を真剣に話すのには、格好な場所だと感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9964f/>

忙しい未来

2010年10月17日07時18分発行